

梅が香によみがえる三人の女

西松 布咏

梅の花が一輪ずつほころぶ頃、夜更けになると私は三味線と共に三人の女になって行った。

近くに迫った「貞女の夢・儂」公演のため繰返し唄ってゆくうちに過ぎし日々が鮮やかによみがえってくる。

「艶容女舞衣」の「お園」は小唄の稽古を始めた二十代から唄っていた。夜更けに木枯らしを聞く暗い部屋という場面をいつも想像していたが、哀しげな白い横顔が勘十郎さんの操る人形になるとはまさに夢のようでハ片糸の解いてあかせぬ物想いVの切ない声が次第に浮き彫りされ、健気に夫の帰りを待つお園のすがたに大きく重なっていった。

「桂川連理柵」の繁大夫節「帯屋」は地唄の西松文一師から伝授された。

明治四十一年に生まれて間もなく視力を失った師は大坂文楽で鶴沢雷三の名で修行に励んでいたが、人形の動きを見ることが出来ない盲人は不採用との風潮を機に義太夫を断念し、地唄の道を歩むことになる。

地唄舞の舞台で無心に唄う師の姿に魅せられ、ただ一人の弟子となり差し向かいの稽古は厳しかったが、心かよう至福の時間であった。

「帯屋」を舞台にかけたのは青山円形劇場で一九八九年のリサイタルⅢ「哀すれば唄」が最初だった。

ふとしたことから隣に住むあどけない十六歳の娘お半に夢中になる夫の心を取り戻そうと、必死で口説く

妻お絹のやるせなさやエリックサティの「ヴェクサシオン・いらだちの意」のピアノをバックに唄った。が：その冒険は賛否両論であったのもなつかしく思い出す。稽古の後で茶飲み話の折に「私だったら心根の優しいお絹さんを大事にするけどねえ」としみじみ語った師がやむなく断念した義太夫とのリミックスをどう仰るだろうか・・・。

「橋姫」は「日本の伝統芸・孝の会」の時に演目のひとつとして馬場あきこさんの流麗な詞を舞踊曲にして欲しいとの依頼を受け、七転八倒の末ようやく完成し、初演の運びとなったのは何と今回と同じ日の二〇〇二年二月二十二日。

能楽師の津村礼次郎師の重厚な仕舞や、今は亡き竹本朝重師の胸に響く義太夫の語りと共に発表させていただいた感激は未だに忘れることが出来ない。

爾来日本舞踊、地唄舞、舞踏の方々と共演してゆくに橋姫の想いのかたちはゆるやかに変わっていった。

当初は、恋した男の心変わりを恨み、果ては貴船の神に恨みの鬼となり憂きひとに思い知らせんVと毅然と訴えるように叫ぶ鬼に化身して幕としたが、いつの頃からか終わりは、恨みながら恋しや・・・と心の底に燃え続ける微かなろうそくの揺らぎを唄うようにした。



後世その恨みは様々にかたちを変えながら、やがては苦しんだ末へ橋姫伝説Vとなり、人々を救う橋の守り神にまでたどり着いた女心の変遷をしみじみ愛おしいと想いながら・・・、繰返し唄い推敲していった八年の年月と共に、私の内なる想いの丈もいつしか変わっていったのだと思う。

鬼となるほどの恨みは、想えばこそその哀しい心の裏返しであり、時の流れと共に永遠の恋へと天に届く一本の細い糸に昇華してゆく。

源氏物語に登場する六条御息所も、嫉妬のあまり枕辺で魂が身体から遊離するほどの恨みで「葵の上」を呪い殺すが、やがては仏門に帰依し、愛しい源氏の君を超えてゆく。

昔の女は、流す涙の川に溺れることなく凜とした姿でやがては恋した男から発つてゆく・・・と夜更けに胸を熱くしながら唄い続けた。



そして春宵のように暖かな二月二十二日は、実相寺に隣接する「池上梅園」の梅の香が闇を透くように優しく包み、満員のお客様の前に立つた黒子の柝の音で幕が開いた。

義太夫の太棹と大夫の洪く響く声の横糸が波のように拡がり、中棹の音と共に唄う女心は微妙に縦糸に伸びてゆく。哀しみを秘めた女の貌は勘十郎さんの手繰る糸で縦横無尽にのみがえり、江戸唄と文楽のリミックスはそれぞれに三人の女の恋心を芳しく匂い立たせたように思う。



幻想の音が聞こえる——「貞女の夢・惨文楽×江戸唄リミックス」

ヤリタ ミサコ

早春の夜の空気が、梅園の香りを運んでくる。畳に座ると部屋の上つらいに目が行く。実相寺の室内壁には、一見子どものイタズラ描きのような、画家村上豊による、のびやかな弁財天が豊満な肢体をくねらせて

いる。見えない音楽が鳴っているようだ。誰もが微笑む。そして節分の鬼のような、トリックスターのような者たちも踊っている。恐い鬼というよりいたずら坊主たちといった風情。壁全体に、動的リズムとポジティブなエネルギーと遊び心が満載だ。お寺の壁という固い先入観を壊すユニークさ。この弁天様といたずら小鬼たちと共演するのは、楽しいだろうな。

黒い屏風が正面に置かれている。和紙の表情が豊かなので、塗り込められた黒という窮屈な感じではなく、開放的で明るい黒。金で描かれた満月が、フルムーンではなく、どこか三日月のような満月なのだ。控えめな光で、ゆったりと受け身の満月。横に広い舞台としてセッティングされているため、この屏風が空間を凜とひきしめている。

始まりは布詠さんの小唄、お園の一人語り。細かいけれど主張のある声が、三味線の糸の繊細な音にのせて、揺れ動く感情を表現する。お園・お絹・橋姫の三人を描くこの日の演目タイトルは「貞女の夢・惨」と題されているが、この日の貞女たちは、すれ違う男を思い続ける女たちのこと。男だって貞女を思っていないわけではない。が見えない何かのきっかけで現実の二人は交錯し、離れていく。しかし貞女たちは、男への強い思慕を持ち続ける。不在の男を思いやり、家族を思いやり、心変わりした男を思いつめ、恋慕の情は一層強くなっていく。

文楽人形が生き生きと演技をする。遣われている人形からこぼれ出てくる、抑えた情感の大きさ。涙も見えないし、溜息も聞こえる。行燈の傍らに、見えない思いが流れ落ちて溢れてゆく。通常の文楽は男声の義太夫節だが、女形人形の一人称の語りとして、布詠さんの女声がびつたりだ。伝統ある人形浄瑠璃のスタイルは完成された様式だが、女の一人称の吐息に込めた複雑な思いというのは、細い女声が語ることで人形と一

致する。この唄の最後は「針のあと」と声を止めて終わる。ある意味では決意のような、女の意志の表現がすばらしかった。

二番目のお絹は、人形の出演がないにも関わらず、数日後に思い出すと幻影のように残像のように人形が見える気がする。繁太夫節と義太夫節の語りが耳から映像化されて感じられるからだ。ここでは男声か夫、布詠さんが女房、とキャラクターが分かれての唄なので、すれ違い具合もよくわかる。ナレーションを含む男声の語りと太棹はメリハリがきいていて、リズムカールにストーリーを追える。

三番目の橋姫は二〇〇六年に美しい日本舞踊ヴァージョンでも拝見したが、身体性に拘束されない人形の方が強い情念を自由に表現できるので、人形ヴァージョンの方が幻想性が強く感じられた。太棹の低い音、ある





時は胡弓で女の泣く声のような音、男声と女声のユニゾンがあったり、三味線の音色の違いが際立って聞こえる場面、般若の面への変身、とスリル満点、見どころ聞きどころ満載だった。鬼女となり般若となった橋姫は、怨みとか呪詛というより悲しみの塊となつていく。布咏さんの声が悲痛な息になつてつーつと細く長く伸びると、身体の限界を超えた感情が圧倒的存在となつて襲つてきた。「恨みながら恋しや」と、絞り出すようにフェイドアウトする声はどこまでも続き、切なさに涙が出た。

義太夫との共演ゆえに、いつも以上に女声の艶を感じる。時に布咏さんの声は、高音のゾクゾクする、一瞬だけ感電するような感応。気が遠くなるような、時間が瞬間的に蒸発してしまつたような、空気の沸点にいたるような、そんな強い力があつた。桐竹勘十郎さんの遣う人形が声をもつていたら、こうであろうと。



勘十郎さんの説明では人形の本体というような仕組みはなく、遣い手の左腕が身体の中心となり、人形の肩と襟とで全体のたたまいを表現するということだ。幻想の存在だと思つた。本来は命のない人形が生きて豊かな感情を表出し、江戸時代に唄われた情感が凝縮され純化され、人形の声となる。この幻想の魔術に、至福の時を過ごした。

### 文楽×江戸唄が魅せてくれた世界

四家 聡

一月に大学の講座で西松布咏先生の唄と三味線を聴いて以来、三味線音楽に興味がわきました。それで、「貞女の夢・唄文楽×江戸唄リミックス」の公演案内を頂いたとき、学生の自分にとってはチケットの得段がちよつと高かつたのですが、「貞女」という今や死語にもなりかねない古めかしい題もなんか古典落語的に感じ、観に行くことにしました。当日会場に入ると、コンサートや舞台演劇とは違つた空気があり、静かな興奮が会場を包んでいました。今まで自分が体験したことのない雰囲気です。これは、落語のときのように気軽に煎餅を食べながら……というわけにはいかないなあと思いました。

やがて、舞台下手に位置した西松先生の唄と三味線「お園」が会場を静かに浸透していき、江戸唄の世界に引き込まれていきました。そして、「べべえくん」と舞台上手から太い三味線の音がして義太夫となり、これまでのクリスタルな音印象にごつごつと凹凸を刻んでいきます。あつ、これがリミックスなのかと感じました。しかし、文楽が初めての自分には、太夫が何を語っているのかよく理解できない部分も多く、自然と目は当日の解説ペーパーに落ちていきます。人形の動きも見たいのに見ているものは手元の紙一枚、舞台と手元

を交互に見るといふことを繰り返していました。

ですが、文楽×江戸唄リミックスが僕に魅せてくれた世界は難解なものではなく、しごく単純なものでした。それは愛の世界。浮気をするのは男の罪、それを許さないのは女の罪というように、そこには深い愛の世界がありました。

女性の怖さといいますが、人の想いの重さを改めて認識することができました。

西松先生と豊竹太夫・鶴沢さんによる声と首で表現される世界、桐竹勘十郎さんが遣う人形の一拳手一拳手、表情の変わらないはずの人形なのにゆつくりと静かに変わつていく人形の顔、顔のみではなく人形の背中で魅せる感情。

僕自身役者をしていいますが、今回の公演はとても勉強になりましたし、今まで自分の中に無かつたものを得ることができました。

### 秋葉原、奇跡の一夜

福岡 俊弘

今にも空から雪が落ちてきそつなくらいに寒い日だった。師匠同伴のイベントはいつも厳しい天候になる。豪雨、強風、嵐……。土砂降りの赤坂、冷たい雨の軽井沢。そう言えば、二年前の秋葉原も雪がはらりと舞つ凍えそうな夜だったよな。

神田明神下、という江戸的な風情の響きがあるが、その交差点が一メートルでも中央通り寄りに入れば、そこは見紛うことなく秋葉原である。家電の町からパソコンの都へ、そして今やアニメとマンガ、フィギュアで埋め尽くされる日本ポップカルチャーの聖地となつた秋葉原。この秋葉原と西松師匠のマッチングというだけで、もう相当にアレである。そりゃ雪だつて霰だつて降ろうものなのだ。

